

学ぶよろこびを育む国語科の授業づくりの要諦

——読むことの指導と書くことの指導の相即——

岡 利 道*

The Main Features of the Creative Teaching Practice of Learning with Pleasure in Japanese Language Education: Relationship of the Teaching Method of Reading with the Teaching Method of Writing

Toshimichi OKA*

1 はじめに

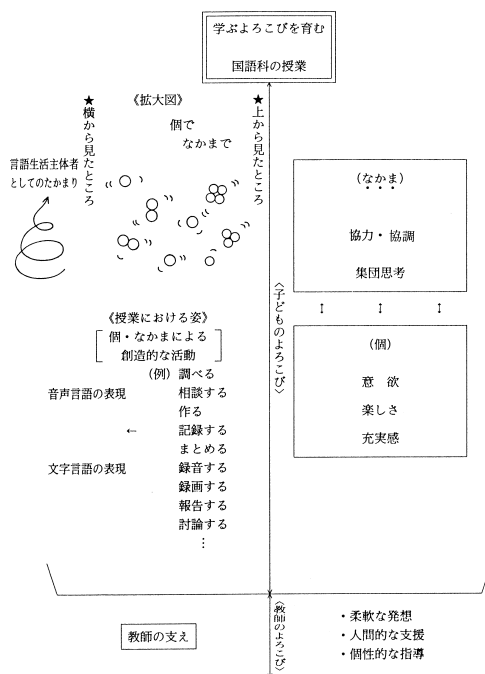
筆者は本学に赴任して間もなく、平成9年7月に、広島文教女子大学双書シリーズの第2巻として、『学ぶよろこびを育む国語科の授業』を出版するというチャンスをいただいた。出版社は、この広島で学術研究の書籍を長年にわたって出版し続けている老舗の溪水社である。

平成9年の時点でのことにはなるが、学習者が意欲的に国語科の学習に取り組む姿を求めて、上記のように学ぶよろこびを育む国語科の授業のあり方を提案した。平成29年にいっても、その主旨にいささかの変動もない。むしろ、今後も変わらないのではないかとさえ考える。

以下のところでは、まず、学ぶよろこびを育む国語科の授業づくりの要諦を再度確認することにしたい (A)。次に、持論を繰り返して終わることは避けたい。故に、他者の目になったつもりで、(A) のことが支持される事例を挙げる (B)。更に、(A) と (B) をふまえ、読むことの指導と書くことの指導との繋がりについて考察する。

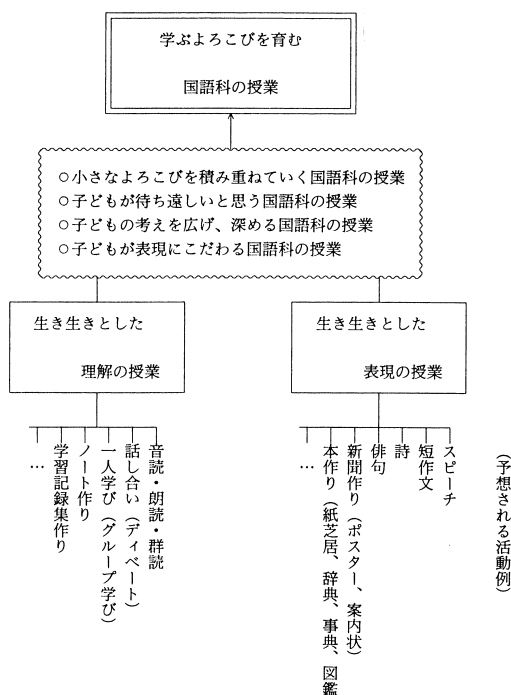
2 学ぶよろこびを育む国語科の授業づくりの要諦——読むことの指導の場合——

すでに発表していることもあり、ポイントを列挙していくことにする。まずは、概念図である (前掲書 pp. 21-22)。視覚的に概略をつかんでいただけるはずである。



図A：望む児童生徒のイメージ

* 本学教授



図B：授業での具体相

本稿では、とりわけ授業の展開への指針となる四要素のうち、三番目の「子どもの考えを広げ、深める国語の授業」をクローズ・アップしたい。それは、紙幅に限りがあるためである。よって、他の要素についての同様なアプローチは、別の機会に譲らせていただく。

前掲書では、「子どもの考えを広げ、深める国語の授業」の具体例として、小学校五年文学教材「春先のひょう」を読む場合を示した。そこでの基本的な考え方を、次に掲げておきたい。

授業でねらったことは、子どもたちに、
《登場人物に対する考えを広げ、深めさせる》ということであった。ここで言う考えを広げ、深めるとは、次のようなことを意味する。

- a 自分なりのこだわり、つまり心に
ひっかかることを大切にする（これを
自分の問題とする）

b 問題の解決の過程においては、一つ
一つの語句、また、それを含むところ
の描写や説明を手がかりとして考える

c a・bを経て、自分が納得のいくと
ころまでつきつめる

aをめぐるって考えるとき、bの部分が広げ
ること（ヨコに向かうこと）であり、cの部
分が深めること（タテに向かうこと）である。
(前掲書 p. 37)

この基本的な考え方は、読むことにおいてで
けでなく、書くことにおいても通底するという
ことが、本稿での主眼である。

3 子どもの考えを広げ、深める日記指導 の事例

日記を書く（つける）ということは、学齢期
にある人だけに限らず、どの世代の人たちにも
馴染みのある営みであるといえよう。筆者は、
かねてからその教育的価値に注目してきた。こ
こでは、日記指導に関する基本的な事柄、注目
すべき日記指導の事例、全体のまとめという順
に述べていくことにする。

(1) 日記指導に関する基本的な事柄

日記とは、そもそもどのような性質のもので
あろうか。辞典・事典類によれば、以下のよう
な記述となっている。

- ・出来事や感想を一日ごとにまとめ、日づけ
をつけて、その当日または接近した時点で
記録すること。また、その記録。【日本国語
大辞典】
- ・日々の出来事や感想などを記録したもので
ある。日記は、基本的には、私的な記録で
あるから、内容、型式、方法において、社

会的通念上の規則はない。記録者の動機や目的によって、生活日記・文学（芸術）日記・紀行日記・観察日記などの様式が生まれる。【国語教育指導用語辞典】

- ・その日その日の出来事や筆者の感じたこと、考えたことを記録したものが日記であり、書く人の意図や立場などによって、様々な性格の日記がつづられている。【教育学大事典】
- ・日常の生活を、ある目的に従って継続的に書いていく、日々の記録。目的によって、生活日記とも、読書日記とも、観察・調査日記ともなりうる。【新作文指導事典】
- ・日記は個人の日々の生活記録である。日記は他から強制されて書くものでなく全く自分自身の要求から自分自身の為を書くものである。日記は社会生活の圧力から来る不快感情を解消する。【教育学辞典】
- ・日記は、毎日の生活を振り返り、継続的に書く記録文である。いろいろな種類があるが、大別すると、自分の毎日の生活とそれに対する感想を書いたもの（生活日記）と、学級日記や観察日記のように後で他の人々が読むことを予想した記録としての性質の強いものとに分けられえ。【現代学校教育大事典】
- ・児童が日記を書く場合は行動列挙的であるのに対し、青年の日記は、その日その折にもっとも強く感じた自分の気持ちが主に述べられる。日記が青年にとって唯一の真実の自己解放の場であるから。【児童学事典】
- ・記録の一種。個人や集団の日常生活についての、ものの見方や考え方を深めたり、広めたり、反省したりするために、自己の生活や自己をとりまく日々のことがら、できごと、感想などを、継続的に書きしるした

もの。【国語教育研究大辞典】

それぞれ示唆に富んでいるが、筆者としては、とりわけ最終のものを支持するものである。その内容は、本稿での筆者の主張と合致するからである。（下線は筆者による。）

次は、日記指導とはどのような内容を包含するのか、という検討に入る。先と同様にまとめてみよう。

- ・学級担任の教師が学校の子どもの書いた日記を読み、児童生徒の理解を深めたり、指導・助言を行ったりして、生活（生徒）指導を進める方法である。…学校（学級）によって、日々の生活の中で感じたことや考えたことに書く重点がおかれたり、また学習や生活を決められた欄に記入して報告することに重点がおかれたりするなど、日記指導のねらいに応じて様々な日記帳が用いられ、その書かれた内容の取り扱いも一様ではない。学級担任の教師が日記指導を行おうとする場合、まず学級の子どもたちに日記を書かせ、それを教師に提出させる意図を、子どもたちの発達段階に即し、理解・納得させなければならない。さらにそれ以前において、教師自身がなぜ日記指導をしなければならいかを明確にし、子どもの親や学校の同僚にも説明できるようになっていなければならない。いいかえれば、他の教師のしていることを安易にまねるのではなく、自分としてこういう仕方での日記指導を行い、こうすることによって、このような効果を上げたいという構想や見通しを立てておくことが必要である。このような意図を教師が説明する場合に、ときには子どもの側から、先生はこうしてほしい、日

記をこう読んでほしいというような希望や意見が出される場合があるが、必要によってそれらを受け入れ、日記指導を進めるならば、子どもたちは、「先生に命じられたから書く」という姿勢ではなく、すすんで書く姿勢が築かれていくであろう。【新教育学大事典】

- ・日記指導は、児童生徒の全学習活動にわたる一つの指導形態として定着している。その特徴として、主に生活指導を目的としたものと、学習指導を目的としたものとに大別される。本来、日記は自己の生活の反省であり、表現であるので、教師と児童生徒との信頼関係や心の触れ合いを大切にしたい指導と、教師がはっきりとした指導目標をもつことによって、生きた日記指導ができる。

【現代学校教育大事典】

- ・日記指導は、児童・生徒の全学習活動にわたる指導形態として一般化しているが、その特徴は大きく二つに分けられる。すなわち、その一つは生活指導のためであり、あ

と一つは学習指導のためである。【国語教育指導用語辞典】

日記指導について、上記の一番目の説明を長く引いたように、そこに意義が集約されていると見ていいだろう。適切に指導を進めていくなれば、間違いなく成果は上がるだろう。ただし、指導のための時間の確保は、今後も難しい課題となることも想像に難くない。

更に歩を進め、最も一般的な日記である生活日記の指導に焦点化したい。生活日記では、子どもたちが一日の中で、見たり、聞いたり、行動したり、考えたりしたことの中で、嬉しかったり、悲しかったり最も心の動きの強かったものを書く、あるいは一日の生活を振り返って

まとめるように仕向ける。日記指導の権威である亀村五郎（東京・成蹊小学校にて指導）は、生活日記の役割として次の七項目を挙げている。

- 1 ひとりびとりの子どもを知るために
- 2 継続的に子どもの生活を知るために
- 3 物の見方・考え方を深めるために
- 4 文章表現力をゆたかにするために
- 5 個性をのびしゆたかにするために
- 6 子ども自身の発達のために
- 7 教師の考えを知ってもらうために

亀村には『日記指導』という著作をはじめとして、生活日記の指導を通した人間教育とも呼ぶべき業績が残されている。とりわけ三つ目は、本稿の主張点と合致している。

生活日記の他に、読書日記、観察日記、学級日記（日誌）などがあるが、『生活綴方事典』でいうところの「特殊日記；一般の日記（生活日記）に対して、日々の特殊な事象だけに注意して書く日記。」、あるいは『国語教育辞典』でいうところの「ある主題や題材について書く日記は、ある集団が『窓』なら窓について書き続けたり、一人ひとりがそれぞれ違った主題や題材について書き続けるというもの。」が、本稿でメイン・ターゲットとするテーマ日記である。西郷竹彦の指導・監修による奄美文芸教育研究会のテーマ日記の指導もその一つである。

彼らはテーマ日記を「一つのテーマ（主題）のもとに毎日書きつづけることで対象についての認識をひろげ、ふかめることをめざす日記」と定義している。まさに、本稿で重視することである。教師が見守る姿勢で臨む中、子ども自らが書き続けていき、ものの見方や考え方を獲得し、更に新たな表現方法を体得していく過程が示されている。それはまさに、自己と他者、

自己と対面する事象について、はじめは浅く、歪んでいて、誤っていた認識が、必然的に矛盾を引き起こし、やがてその矛盾に気づき、それを超えていくことで、より認識を広げ、深めることになるという過程である。

彼らはテーマ日記を書かせる理由を、以下のように説いている。

私たちは、ある出来事の一面だけを見て、人物や出来事の全てを評価しがちである。しかし、断片的な見方でも、くり返しくり返されることによって、全体的なイメージが浮かび上がってくる。もっと正しくイメージ化するためには、多面的な見方が必要といえる。物事やある人物を認識するためには、文においては、くり返し書く中で、その人物のイメージを浮きぼりにしていくことになるわけである。「テーマ日記」とは物事をそのように見るための訓練といえる。テーマ（主題）については物を見るのに一つの観点を持つということ。ただ漠然と見ない練習も大事である。

テーマ日記のポイントは如上のようであり、認識を深める、認識の変革をめざし、亀村がいうところの「3 物の見方・考え方を深めるために」のところと脈を通じているのである。その実現を図るには、生活日記が陥りがちな恣意的な題材選定では十分ではない。テーマ（主題）意識を持たせ、継続的に指導していくときに、効果をもたらすのである。

(2) 注目すべき日記指導の事例

テーマ日記には当然ながらテーマ（主題）がある。子どもが選定する。それは子どもが関心の深いものである必要がある。はじめは生活日記を書いており、教師がそれを読む中で子ども

にとって切実な問題・悩みなどが掴める。見つけ次第、テーマ日記へと切り替えるかどうか考える。そのタイミングは、二・三日続いて一つの対象を見つめる日記を書いてくるようになったり、その子が今まさに強く関心を寄せていることがあると気づいたりしたときである。そこで教師の働きかけにより、テーマ日記へと入らせるのである。それから定まったテーマで日記を書いていき、認識に深まりを感じられたと判断したとき、まとめを書かせてテーマを締めくくらせるのである。テーマが決まったそのとき、テーマ日記の約束を子どもとする。約束とは次のようなものである。

◎テーマ日記の約束

- 1 今日の出来事を書くこと
- 2 決めたテーマについて書くこと
- 3 どんな事でもテーマと結びつけて書くこと
- 4 前日の日記の〈よみかえし〉をしてから書くこと
- 5 〈だい〉を決めてから書くこと

1の今日のことを書くということと、5のどんなことを書くかを決めてから書くというのは生活日記を書く場合も同じである。2、3、4がテーマ日記ならではのものとなる。テーマ日記では、子どもが今一番強く思っていることをテーマとする。それを追い続け、考えて書き続けることで認識の広がりや深まりを得させるのである。

では、典型的な事例を挙げてみよう。それは、以下に示すように、教師の言葉かけより、子どもの取り組みが始まったケースである。

T 自分が一ばん好きな人でよろしい、その人のやさしいところについてだけ続けて書いて下さい。それも、きょう一日のできごとのなかで、その人をやさしいなと思ったことについてだけ書きなさい。それから、次の日に書く時は、前の日に書いたのを読みかえして、前の日に書かなかったことについて書きなさい。はんたいに、自分がいやだなと思う人についてでもいいんですよ。

以下は、一年生の女兒が書いた作品である。

きょう、にいちゃんをいやだな、きらいだなとおもったことをかきます。

十一月十八日 テレビ

きょう、わたしがテレビをつけるとき、にいちゃんが8ちゃんをつけました。そして、わたしが、「1ちゃんせえ。」といいました。そしたら、にいちゃんが、「いや。」といって、わたしが、「ぜったいせえ。」といってなきました。やっとまわしてくれました。にいちゃんは、「十ぶんだけよや。」といったのに、たった一びょうぐらいで、また、まわしました。にいちゃんは、としうだからかってばっかりして、すかんにいちゃんだなとおもいました。

○かってばかりするにいちゃんだ。

【考察】まず、テーマについてである。子ども一人ひとりとよく話し合って設定すること。そして、テーマを太く書かせ枠組みさせる。これらは、テーマ意識を明確にするためである。

やはり、注目点は指導言である。「にいちゃんも見たいテレビがあったから8ちゃんにかえたのでしょうね。かわりばんこにしましょうね。」としがちである。しかし、この指導をした教師は「子どもの認識・表現する力を引き出し育てる」という観点から見た場合、あまりふさわしくない」と述べている。それは、「子どもの中の事件を教師が判断して問題点を出し、いいきかせ

る指導言は、子どもに表現意欲を失わせ、作文ぎらいにさせている」からだというのである。

教師の指導言は、子どもに大きな影響を与えるものである。その指導言があまり肯定的な言葉ではないと子どもの意欲は薄れてしまう。テーマは、“にいちゃんをいやだな、きらいだなとおもったこと”とし、教師もそれを書くよう指導しているのに、にいちゃんも見たいテレビがあったのだから…と書くことは、おかしいのである。女兒は、これから日記を書き続けていく中で注意ばかりされるのである。そうなると、日記を書くことへのやる気を失ってしまう。

「テーマ日記」における指導言は、子どもの認識、表現がどんなに浅く歪んだものであっても、まずその子が言いたいことをすべて言いつくさせる。ふりかえり書き続けていく中で、「きらいなにいちゃん」だけではないことに教師は気づかせる。それにより、「にいちゃんのいいところ」と兄に対する認識が変わらざるを得なくなるのである。

第一日目の指導言は、“かってばかりするにいちゃんだ。”としてある。設定したテーマと女兒に寄り添って書かれている。これが、次の日記を書くやる気を引き出す。

以下は、「テーマ日記」の続きである。

二日目

十一月十九日 ねこ

きょう、わたしが、ねこをだいてると、にいちゃんが、「ねこおけ。」といいました。そして、にいちゃんは、「じぶんばかりだいて。」といいました。そして、にいちゃんが、わたしのあたまを、すこし、けりました。わたしは、「いたくない。」といいました。にいちゃんが、「もういっかいしようか。」といいました。そして、わたしは、にげました。○けったのかい、ひさみを。ひどい。

【考察】「徹底して、子どもの目と心になりきって共感する。極端な言い方をすれば、あおってやることである。子どもが書きたいことを、心おきなく書くようにするには子どもの表現に共感することが基本なのだ。この指導が子どもを解放していくキーポイントになる。」と述べられているのは傾聴に値する。

四日目

十一月二十一日 なぜ（名瀬）
きょう、がっこうからかえってくるとき、にいちゃんが、
「なぜにいかさんから。」
といました。わたしは、
「いいよ。」
といました。わたしは、
「ほんとにいくわけ。」
といました。そしたら、にいちゃんが、
「うんいくんど。」
といました。
「わたしもいきたいなあ。」
といました。にいちゃんが、
「いかさん。」
といったので、わたしが、
「にいちゃんのなぜじゃないでしょう。」
といました。そしたら、にいちゃんが、
「わん（ほく）のいうこときくだろう。」
といました。そして、わたしが
「うん。」「うん。」
といました。
○やっとなで、なぜにイケたのだね。

【考察】名瀬は、奄美の中心都市である。そこへ女兒は行きたがっているが、兄はだめだと言っている。しかし、“にいちゃんのなぜじゃない”と言われ、条件付きで連れて行くことになった。そのときの女兒の気持ちに寄り添って書かれた指導言である。

五日目

十一月二十二日 ポテト
きょう、わたしがおうちでポテトをたべていたら、にいちゃんがきて、
「くれれ。」
といました。わたしが、
「いや。」
といったら、にいちゃんが、だまってとりました。そして、わたしは、うそなきをしました。そして、にいちゃんが、

「ごめんや。」
といました。わたしは、
「うそなきでした。」
といました。
○ひさみのかち。

六日目

十一月二十三日 ちょ金
きょうのよる、にいちゃんが、わたしのちょ金をぬすもうとしました。
そして、わたしが、
「ひとのちょ金ぬすむな。」
といました。そして、にいちゃんが、
「いいがな。」
といました。わたしは、にいちゃんに、
「そしたら、おおきくなったらどろぼうのはじまりなるとや。」
といました。
○よう、いうた。

【考察】女兒が言ったことを肯定的に受け止めている。共感した指導言である。

七日目

十一月二十四日 おふろ
きょう、にいちゃんが、わたしに、
「ひさみからおふろにはいれ。」
といました。わたしは、
「いや。」
といって、
「にいちゃんからさきにはいれ。」
といました。そして、にいちゃんとわたしとけんかになりました。にいちゃんがわたしをおいかけたからほうきでうちました。そして、にいちゃんがなきました。わたしが、
「ア、——男がないた。」
といったら、にいちゃんが、
「うそなきでした。」
といました。
わたしは、よかったとおもいました。
○うそなきで、ほんとによかったね。

【考察】指導言が確かであれば、子どもは生き生きと対象を描く。このことから、この方法の有効性と指導言の重要さがわかる。

七日間もにいちゃんのいやなところ、きらいなところを書き続けると、だんだん他に書くことがなくなってくる。そこで今度はにいちゃんがやさしくしてくれたことを書くことを伝える。

九日目

きょう、にいちちゃんが、やさしくしてくれたことを書きます。

十一月二十六日 学校
きょうのあさ、学校にいくとき、わたしが、バスにおくれようとしたら、にいちちゃんが、「はやくいそがなば。」といいました。そして、にいちちゃんがランドセルをもってはりました。わたしにもいちちゃんのうしろからはりました。そして、にいちちゃんが、「あとちょっとだから、ランドセルもて。」といいました。

○やさしいにいちちゃん、いいにいちちゃん。

【考察】にいちちゃんをいやだ、きらいだととらえてきたのを、にいちちゃんをいろいろな角度から認識することができる力をつけるため、逆の視点から見させる。

いやなところばかりだったにいちちゃんにも、ランドセルを持ってあげるやさしいところがある。指導言もテーマや、彼女の心を意識して書かれている。

十日目

十一月二十七日 アイスクリーム
きょう、学校からかえってきて、にいちちゃんが、みせにいきました。そして、にいちちゃんが、アイスクリームをふたつかいました。わたしは、「なんでふたつかうわけ。」といいました。にいちちゃんは、「ひさみのためよ。」といいました。わたしは、うれしくなりました。

十一日目

十一月二十八日 おんぶ
きょう、げんかんにぞうりがなかったのに、にいちちゃんが、わたしをおんぶして、もうひとつのげんかんにつれていきました。だけど、ありませんでした。また、おんぶして、おもてのげんかんにいったらありました。にいちちゃんが、「ひさみは、おもたいなあ。」といいました。そして、わたしが、わらったら、にいちちゃんが、たおれようとしてました。わたしが、「アーアー、あぶない。」といったら、わたしまでたおれました。

十二日目

十一月二十九日 かおあらい

きょうのあさ、わたしが、はみがきをしていると、にいちちゃんが、「ひさみはやく、はみがきせんば、おくれるよう。」といいました。わたしは、「ほんと。」といいました。そして、にいちちゃんが、「はやく、ひさみからかおあえ。」といいました。
○やさしいにいちちゃんだ。

【考察】「ひさみからあえ」という言葉からにいちちゃんのやさしさが伝わってくる。彼女の目にも、にいちちゃんのやさしさが映っている。

十五日目

十二月二日 やさしくせ
きょう、わたしが、にいちちゃんに、「やさしくせんば、につきにかかれんがねえ。」といいました。そしたら、にいちちゃんが、「やさしくするのに、ひさみが、すぐ、けんかするがねえ。」といいました。そして、おかあさんが、「ほんとじゃが、すぐ、ひさみがむかうからよう。」といいました。わたしは、おかあさんに、「うそじゃ。」といいました。
○にいちちゃんがやさしくしてくれたことを、にいちちゃんにはないしょでみつけてごらん。

【考察】何気ない日常の中におけるにいちちゃんの言動に隠されているやさしさに気づくよう指導されている。

十六日目

十二月三日 まど
きょうのよる、にいちちゃんが、テレビをつけようとしたら、わたしが、「うるさい。」といいました。そして、にいちちゃんが、「そしたら、まどしめるが。」といいました。わたしが、「まだこえが、きこえるもん。」といったら、にいちちゃんが、「だればテレビけすからよ。」といいました。そして、しずかになりました。
○ほんとにやさしいにいちちゃんだ。

【考察】十一月十八日の日記にはチャンネルを取り合い、きらいなにいちちゃんだと書かれていた。それと比べると、彼女の中に別のにいちちゃん像が現れている。あんなにきらいだ、いやだと思っていたにいちちゃんのやさしいところを発見

し、多面的に見ることができていることがわかる。続けて書き、読み返し、比べることで認識が変容し深まっていく。

最後に、これまでの「テーマ日記」を読み返し、まとめたものが次の作文である。

にいちゃん
にいちゃんは、わたしが、テレビを見ていたら、すぐ、にいちゃんがきて、ほかのチャンネルにまわしたり、わたしが、おかしをたべとったら、おかしをとりあげます。
そして、わたしのちょい金ばこから、お金をとったりして、にいちゃんは、じぶんのかってばかりして、いやなにいちゃんとおもいます。
でも、にいちゃんは、やさしいときもあります。わたしをおんぶしてくれたり、そして、にいちゃんがほんをよんできかせたりします。
わたしは、にいちゃんが、いつもわたしとあそんでいるときに、やさしいにいちゃんとおもいます。

【考察】前半ににいちゃんのいやなところを書き、後半におんぶしてくれたり、本を読んでくれたりすることを具体的に書いており、にいちゃんのかんやさを表現し、自分なりにまとめている。

教師の意図した通り、女兒の認識に変化が生じ、兄の一面だけを見ていた状態から明らかに変化している。まさに子どもの考えを広げ、深める日記指導の事例である。

(3) 全体のまとめ

奄美文芸教育研究会が推進したテーマ日記は、単発的な日記で終わるのではなく、一貫性を持った文章表現活動である。

事例から看取できることは、以下のことである。子ども自身が問題とせざるを得ないテーマで、ひたすら日記を書き続ける。教師は子どもの気持ちに寄り添い、自己発見できたことを褒める指導言で反応し、じっくりと子どもの考えが熟していくのを待つのである。物事を一方向から見ていた子どもの視点は、至極普通である。

教師は、一方向から見ることを止めず、視野の狭さとせず、突っこんで見させたのである。その結果、様々な角度から物事を見ることができるようになっていくわけである。対象についての浅い認識が克服され、広まったり深まったりするだけでなく、外発的動機づけで始まった思考が、内発的動機づけと言ってもいいほど主体的になり、相容れなかった対象の二つの面を統合し、新しい考えを創造できたのは、書き綴る作業の継続のたまものであろう。その過程は、一つのテーマのもとでの子どもと教師の対一の関わりの中で展開されていくのである。

4 おわりに

筆者は、ここで紹介することができたところの、自身の主張の証左となる事例を心から素晴らしいと感じるし、並み大抵の努力では生まれないだろうとの畏怖の念を抱くものである。西郷竹彦の指導だからできたのだろう、奄美文芸教育研究会しかなし得ないものだろう、との見方をする人がいるかもしれない。筆者はその逆の見方をする。その事例は、氷山の一角である。一つでも事例があるということは、それに類する実践が近くで、遠くであるという可能性が大きい。更に考えることは、読むことの指導で達成され、書くことの指導でも達成された方法は、普遍性を持った方法に近づいたということである。また、先に見たテーマ日記の約束は五つだけであり、いたってシンプルである。決して離れ技を求めるものではないのである。今後の課題はただ一点、テーマ日記の指導のような、地道で人間味あふれる教育の営みを一つでも多く発掘することである。

引用・参考文献

奄美文芸教育研究会. 1981. テーマ日記の指導. 明治

- 図書出版。
奄美文芸教育研究会. 1986. 生活日記・テーマ日記の指導. 明治図書出版。
亀村五郎. 1971. 日記指導. 百合出版。
西郷竹彦. 1997. 西郷竹彦文芸・教育全集20. 明治図書出版。
〈辞典類〉
児童学事典. 1980. 光生館。
国語教育辞典. 2001. 日本国語教育学会。
国語教育研究大辞典. 1991. 明治図書出版。
国語教育指導用語辞典. 1984. 教育出版。
教育大事典. 1979. 第一法規。
教育学辞典. 1938. 岩波書店。
日本国語大辞典. 2001. 小学館。
生活綴方事典. 1958. 明治図書出版。
現代学校教育大事典. 2002. ぎょうせい。
新作文指導事典. 1982. 第一法規出版。